

『徒然草』第三二段を読む

——「月みる気色」と「ものあはれなり」を中心に——

東 望 歩

一 はじめに

『徒然草』第三二段「九月廿日の比」は、第三〇段「人のなきあ」とばかり悲しきはなし」から展開し、雪の朝に文を通わせた思い出を「今はなき人なれば、かばかりの事もわすれがたし」と語る第三一段「雪のおもしろう降たりし朝」に続く章段である。

九月廿日の比、ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩く事侍りしに、思し出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうちかをりて、忍びたるけはひ、いとものあはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事ざまの優におぼえて、

物のかくれよりしはし見るたるに、妻戸をいま少しおしあけて、月見る気色なり。やがてかけこもらましかば、口惜しからまし。あとまで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひによるべし。

その人、ほどなくうせにけると聞き侍りし。

九月二十日頃、「ある人」に誘われて夜明けまで夜歩きをした途上、「ある人」の「思し出づる所」に、ともに立ち寄った時の思い出を語る。その「荒れたる庭」には露が下り、ことさらに薰きしめたようではない香りがしつとりと漂っている。「ある人」が訪問を終えて帰った後も、その住まいの「忍びたるけはひ」に「いとものあはれなり」と感銘を受けた筆者は立ち去りがたく「物のかくれよりしはし見るたる」。すると、「ある人」を送り出した後も「妻戸を

いま少しおしあけて」その場に留まる主の「月見る気色」を目にするようになった。主のふるまいに、筆者は「やがてかけこもらましかば、口惜しからまし」と感じ入る。「あとまで見る人あり」とは知るよしもないはずの風流なふるまいは、「わざとならぬ」風情が色濃く感じられた住まいと同様、主の「ただ朝夕の心づかひによる」ものだろうと考えるのであった。

これは、第三一段で、雪の朝に所用があつて文を送った際、雪について言及しなかったことについて、「この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人」、「返々口をしき御心」と非難を受けた思い出に呼応しており、雪や月などの風物に普段から心を留め、ことのついでであっても寄せる心を忘れない「朝夕の心づかひ」を慕わしいものと見ている。

そして、「その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし」と章段は閉じられる。今はなき人のふるまいを賛美する形で回顧する第三一段および第三二段は、第三二段「なに事も、古き世のみぞしたはしきとする兼好の姿勢が強く表れたものと理解されている」。

また、第三二段以前と第三二段以降には「兼好の対象把握や表現、それをささえるしそくに、たしかに飛躍がある」ことが確認され、成立時期との関わりにまで踏み込んで言及されることもある。第三二段までを第一部、第三二段以降を第二部とする見方に対して、両

段は「むしろ第二部の冒頭にあって第一部とのつながりの役割を果たすもの」^③とみる向きもある。いずれにせよ、作品の転換点に置かれた重要な章段であるといえるだろう。

本論では、第三二段に関する先行研究を概観し、そこでの論点を整理するとともに、『枕草子』引用を軸に、章段で用いられているいくつかの表現について、改めて考察するものである。

二 虚構性の問題

第三二段についての論点のひとつとして、本段の内容が筆者の実体験によるものか、仮構されたものか、という点があった。

虚構と見なす立場からは、雪と月とを対比させた第三一段との構成の類似から「理想を託した作り話」^④ではないか、と考える橘純一氏、「いままでの段の進め方からいうと整いすぎていて、仮構の話かとも思われる」^⑤と第三〇段までの質的な変化に着目した保坂弘司氏の指摘がある。

事実と見なす立場を早くに取ったものとして、「書き出し、更に同様な描写の文の一〇四段、一〇五段の文章と比較し、それらと、家集の三十二番歌の詞書などから、兼好の体験談とみるのが妥当」^⑥との高乗勲氏の指摘がある。

第一〇四段は、「荒れたる宿の、人目なきに、女のはばかりる事あるころにて、つれづれと籠り居たるを、或人、とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに」の冒頭で始まる。「来しかた行末かけて、まめやかなる御物語」の後、明らかにいく春の曙空の下でにしみじみと別れを惜しむ二人の姿とともに、女の住まいについて「内のさまは、いたくすさまじからず、心にくく、火はあなたにほのかなれど、もののきらなど見えて、俄かにしもあらぬ匂ひ、いとなつかしう住みなしたり」と「梢も庭もめづらしく青みわたたりたる卯月ばかりのあけぼの、艶にをかしかりしを思し出でて、桂の木の大きなるが隠るるまで、今も見送り給ふ」とことごとしからぬ「匂ひ」と「庭」の風情に言及する。また、第一〇五段は、「有明の月さやかなれども、限なくはあらぬ」夜の男女の「物語するさま」を描写したものである。「えもいはぬ匂ひの、さとかをりたるこそ、をかし」、「けはひなど、はつればつれ聞えたるもゆかし」とその様子を賞する。いくつかの要素が確かに第三二段を想起させる章段だが、これをもって第三二段を実体験と見ることにについては若干の疑義がある。こうした機会に居合わせるが多かったことを示唆する意図だろうか。

兼好家集の「三十二番の歌の詞書」^⑦は、「冬の夜、あれたる所のすのこにしりかけて、木だかき松のこのまよりくまなくくもりたる

月を見て、あか月まで物がたりし侍りける人に」である。「この冬の夜の忘れがたい体験が「徒然草」の第百五段に虚構化されたであろうこと」^⑧を指摘しており、確かに「冬の夜」である以上、「九月廿日の比」の出来事と語られる第三二段と同時期ではありえない。ただし、「おもひいづやのきのしのぶに露さえて松の葉わけの月を見し夜は」の和歌に用いられている「のきのしのぶ」、「露」の語は、第三二段の状況と重なり、興味深い点である。

また、兼好家集については、新体系頭注に引かれる二七五番歌詞書「藤大納言殿の松尾の花見におはせしに、誘はれたてまつりて、山里の花に」において、「誘はれたてまつりて」という表現が兼好自身の体験において用いられていることが、第三二段の事実性を裏付ける証左のひとつとして扱われている。

しかし、決定的な論証が不可能である以上、虚構であることの積極的な理由が見出だせない限り、事実であることを明確に否定することは難しいだろう。このため、虚構であるか事実であるかの認定を越えて、どのように書かれたのか、に着目されていくようになっていった。

桑原博史氏は、時間の明記がある起筆形式として、第一段、第四一段、第五〇段、第七〇段、第二四三段を挙げ、第七〇段をのぞいては全て作者の直接経験をもとにする形で書かれていることを示

し、「まったくの虚構というより、その話の底に実体験がひそんでいると考えた方がよさそう」だが、「章段中に登場する作者の姿には、変形を認めたい」とする。^⑦直接経験の回想形式である「し・しか」叙述についても、それが、ある種の虚構性を必ずしも否定するものではないとしている。^⑧

横井博氏は、事実と考えるのが一般的であるが、ここに描かれる情趣的、感覚的なものは、「兼好の王朝憧憬の心によって、現実から極めて意図的に選びとられた世界」であり、「章段のなかにおける兼好の位置が、甚だしく曖昧であるような印象」で「現実感が極めて希薄」であることと合わせて、「ほとんど仮構的に設定された世界」であると言う。^⑨

三田村雅子氏は、『徒然草寿命院抄』以来、影響が指摘されてきた『枕草子』一七三段との関係を論じる中で、「いかにも兼好自身の体験にもとづくような」書かれ方をしていることを認めた上で、四三段や一〇五段にも見られる「このような兼好のぞき見的視野の提示」は、「フィクション的な傾向の強い場面に現実性を付与するための方法」としてあったことを指摘し、「仮にこれに似たような体験があったところで」先行文芸の影響から、「王朝風のフィクションな文章」が書かれたことを否定するものではない、としている。^⑩

第三二段におけるもうひとつの論点として、『徒然草』最初の注

釈『徒然草寿命院抄』（秦宗巴著・一六〇四年成立）や林羅山『野槌』（一六二一年成立）などの古注釈以来指摘されてきた、この『枕草子』との関係が挙げられる。

三 『枕草子』引用

兼好が読んだと考えられる『枕草子』については、「現存諸本二類四系統のうち、雑纂形態を受け継ぎ、各章段間に酷似した内容（特に跋文）を持つことから「毫及愚翁」の奥書をもつ三卷本系統であるとする説」と、「二段の引用文「人には木の橋のやうに思はるよ」の類似やその内容的配列、類似した表現をもつことから、現存諸本のうち前田家本であるという説」に分かれるが、「形態や内容面から現段階において現存諸本中の特定の一本に限定することは難しく、（中略）更に兼好の古今集や源氏物語を校合するといった古典研究の事績からみて複数の諸本を見る機会があったことも十分に考えられ、いくつかの系統本を見ていた可能性もあり、また、現存諸本とは相異なる伝本の存在していた可能性も皆無とはいえない」状況である。^⑪ただし、第三二段との影響関係が指摘される一七三段「ある所に、なにの君とかや言ひける人のもとに」については、現存諸本系統では三卷本にのみ存在する章段である。

ある所に、なにの君とかや言ひける人のもとに、君達にはあらねど、そのころいたうすいたる者に言はれ、心ばせなどある人の、九月ばかりに行きて、有明のいみじう霧り満ちておもしろきに、名残思ひ出でられむと、ことばをつくして出づるに、今はいぬらむと、遠く見送るほど、えも言はず艶なり。出づるかたを見せて立ち帰り、立部の間に陰に添ひて立ちて、なほ行きやらぬさまに、いま一度いひ知らせむと思ふに、『有明の月のありつつも』としのびやかにうち言ひて、さしのぞきたる、髪^④の頭にも寄り来ず、五寸ばかりさがりて、火をさしともしたるやうなりけるに、月の光もよほされて、おどろかるる心地しければ、やをら出でにけり、とこそ、語りしか。

(一七三段「ある所に、なにの君とかや」三〇二―三〇三頁)

『徒然草寿命院抄』、『野槌』のほか、『徒然草拾遺抄』(一六八六年成立)や『鉄槌』(一六四八年成立)契沖書入などにも、「そのころ」以下の『枕草子』本文が挙げられている。^⑤ 具体的な引用のあり方については、傍線部に示した二箇所、「九月十日の比」と「九月ばかりに行きて、有明のいみじう霧り満ちておもしろき」の季節の一致と、一旦退去した後、物陰に隠れてその様子を窺うという構成の類似がとくに指摘されている。

また、古注釈では引かれていない『枕草子』一七三段冒頭部「ある所のなにの君とかやいひける人」および「君達にはあらねど、そのころいたうすいたる者に言はれ、心ばせなどある人」といった人物のぼかしも共通の構成、技巧と言えるだろう。「君達にはあらねど」までを切って「そのころ」以下が引用されたのは、「誘われ奉りて」という敬語表現から、『徒然草』における「ある人」が貴人として設定されていることから不要と判断されたのだろうか。^⑥

第三二段と合わせて考察されることの多い章段にも、『枕草子』の影響はうかがえる。第一〇四段は『枕草子』七一段「懸想人にて来たるは」、第一〇五段は『枕草子』七九段「返る年の二月二十余日」および二八三段「十二月二十四日、宮の御仏名の」からの影響が指摘されている。^⑦

第一〇五段の冒頭「北の屋かげに消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、限なくはあらぬに」には、「日ごろ降りつる雪の、今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷いみじうしだり」、「有明の月の限なき」、「下簾もかけぬ車」が点描される『枕草子』二八三段からの影響が認められるだろう。

『枕草子』七九段との影響関係の指摘は、冬の月夜に語らう第一〇五段の男女の姿を、梅壺東面の局で「せばき縁に、片つつ方は下な

がら、すこし簾のもと近う寄りゐたまへる」(一四二頁) 藤原斉信と清少納言の対面と重なると見ていいのではないか、と推測されるが、雪の日に訪れた男が「昼ありつる事どもうちはじめて、よろづの事」を語り合い、「片つ方の足は下ながら」暁を告げる「鐘の音」が聞こえるまで「飽かず」に過ごす『枕草子』一七四段「雪のいと高うはあらで」は、「人離れる御堂の廊」で「なみなみにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらん、尽きすまじけれ」と語られる第一〇五段により強く重なるようにも思われる。

また、雪のいと高う降りたる夕暮より、端近う、同じ心なる人二、三人ばかり、火桶を中にすゑて、物語などするほどに、暗うなりぬれど、こなたには火もとまさぬに、おほかたの雪の光、いと白う見えたるに、火箸して灰などかきすさみて、あはれなるもをかしきも、言ひ合はせたるこそをかしけれ。

宵もや過ぎぬらむと思ふほどに、杳の音近う聞ゆれば、あやしと見出だしたるに、時々かやうのをりに、おぼえなく見ゆる人なりけり。『今日の雪をいかにと思ひやりきこえながら、何でふ事にさはりて、その所に暮しつる』など言ふ。『けふ来む』などやうの筋をぞ言ふらむかし。昼ありつる事どもなとうちは

じめて、よろづの事を言ふ。円座ばかりさし出でたれど、片つ方の足は下ながらにあるに、鐘の音なども聞ゆるまで、内にも外にもこの言ふ事は飽かずおぼゆる。明け暗れのほどに、帰るとて、「雪なにの山に満てり」と誦したるは、いとをかしきものなり。

(一七四段「雪のいと高うはあらで」三〇三―三〇四頁)

第三二段で「この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどの、ひがしからん人」として、その「返々口をしき御心」を非難されたのは、「宵」に突然訪問し、「今日の雪をいかにと思ひやりきこえながら、何でふ事にさはりて、その所に暮らしつる」と語る男の風流と対照的なものとして造型されている。

また、ここで「雪のいと高う降り積りたる」日の「宵もや過ぎぬらむと思ふほどに」訪ねてきた男は、「時々かやうのをりに、おぼえなく見ゆる人」とあるという。有明の月に誘われた夜歩き途中、「思し出づる所」に立ち寄る第三二段の「ある人」は、「時々かやうのをりに、おぼえなく見ゆる人」の表現に重ね合わされているのではないだろうか。

月の美しい夜、「思し出づる所」を訪うようなふるまいもまた歓迎されるものであった。『枕草子』二七四段「成信の中將は、入道

兵部卿宮の御子にて」の中で、「月の明き」日、「それに来たらむ人」を次のように賛美している。

さて月の明かきはしも、過ぎにし方、行末まで思ひ残さるることなく、心もあくがれ、めでたく、あはれなる事、たぐひなくおぼゆ。それに来たらむ人は、十日、二十日、一月もしは一年も、まいて七、八年ありて思ひ出でたらむは、いみじうをかしとおぼえて、えあるまじうわりなき所、人目つつむべきやうありとも、かならず立ちながらも物言ひて返し、またとまるべからむは、とどめなどもしつべし。

（二七四段「成信の中將は」四二六～四二七頁）

さて、『枕草子』一七四段で「けふ来む」と引かれているのは、「山ざとは雪ふりつみて道もなしけふこむ人をあはれとは見む」（拾遺・巻四冬・二五二）という平兼盛歌である。

同歌は、一七七段「宮にはじめてまゐりたるころ」で雪の朝に中宮定子のもとに参上した伊周が、「『道もなし』と思ひつるにいかで」との定子のことに「『あはれと』もや御覧ずるとて」と答える場面（三〇九頁）でも用いられている。雪の日の訪問の常套表現であったことが示され、また、こうした和歌を踏まえて実際に訪問

し、そこで折に合った和歌を口にすることが「あはれ」を知るふるまいとして賞揚されているのである。

一七四段「雪のいと高うはあらで」では、訪問の際には「けふ来む」などやうの筋を言い、帰り際には、『和漢朗詠集』の一節「暁梁王の苑に入れば雪群山に満てり／夜庾公の楼に登れば月千里に明らかなり」（巻上冬「雪」三七四）と吟唱する。第三二段に引用される『枕草子』一七五段でも、月夜の雪道を走る車中で、男が『和漢朗詠集』の一節「凜凜として氷鋪けり」（巻上秋「十五夜〈付月〉」二四〇）を繰り返し誦んじるのを「いみじうをかしうて、一夜もありかまほしき」と賞する。

第三二段に引用される『枕草子』一七三段「ある所に、なにの君とかや言ひける人のもとに」でも同様である。男を送り出した「なにの君とかや言ひける人」が「有明の月のありつつも」と「しのびやかに」呟くさまが、「出づるかたを見せて立ち返り、立部の間に陰に添ひて」様子を窺う男に目撃される。

「有明の月のありつつも」とは、柿本人麻呂詠の古歌「長月の有明の月のありつつも君しきまさばわれも忘れじ」（『古今和歌六帖』第一「ありあけ」三六四）あるいは「長月の在明の月も有りつつも君し来まさば我こひめやも」（『拾遺』恋三・七九五）による¹⁷。この歌句は、「九月ばかりに行きて、有明のいみじう霧り満ちておもし

ろきに」という設定から導き出されており、このことから「単に女が口ずさんだ歌というより、本段を主導するモチーフとさえ見てよいのではないか」と指摘されている。¹⁸⁾

出て行くそぶりを見せて、ひそかに女のもとに戻り、隠れて様子を窺う構成は、『伊勢物語』二三段「筒井筒」の「前栽のなかにかくれゐて、河内へいぬるかほにて見れば」（二三七頁）ならびに『大和物語』一四九段「沖つ白浪」の「いでていくと見えて、前栽の中にかくれて」（三八一―三八二頁）の場面にも共通のものである。『大和物語』の女は、「月のいといみじうおもしろきに、かしらかいけづりなどしてをり。夜ふくるまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ」（三八二頁）とあり、「月」の光に照らし出される「髪」に焦点を当てる『枕草子』一七三段の描写との関わりを感じさせる。¹⁹⁾

ただし、『徒然草』第三二段では、「ある人」は「よきほどにて出で給ひ」、その後に「物のかくれよりしばし見ゐたる」語り手とは異なる存在として描かれている。また、交情の後の「艶」なる有明の別れと月の光に照らし出された女の乱れ髪を描き出す『枕草子』一七三段とは異なり、『徒然草』第三二段では、つかの間の訪問が逢瀬であつたかどうか不確かで「その人」の性別すらも明示されない。²⁰⁾

『徒然草』第三二段において描かれる有明の別れとは、いかなるものであつたのか。これを理解するにあたつて重要となるのは、冒頭表現「九月廿日の比」との関わりと「妻戸」という場である。

四 有明の月と「妻戸」

『徒然草』第三二段の冒頭表現「九月廿日の比」は、虚構性に関わる問題に関わるものとして前述のように取り上げられている。冒頭での時間明記という類似形式を持つものとして、第一段「神無月の比」、第四一段「五月五日」、第五〇段「応長の比」、第七〇段「元応の清暑堂の御遊に、玄上は失せにし比」、第二四三段「八になりし年」が挙げられている。²¹⁾

これらの時間明記という形式を持つ章段の特質として、冒頭に掲げられた時間・時季が章段の主題と密接に結びついていることが挙げられる。

第一段「神無月の比」は、「木の葉に埋もるる懸樋」や「閑伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる」という「庵」の佇まいと、「大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるがまはりをきびしく囲ひたりし」庭の対比が章段の主題に強く関わっており、神無月という季節を明記することに必然性がある。第四一段「五月五日」は、

「賀茂の競馬を見侍りし」折の混雑の最中起きた出来事に取材している。第五〇段「応長の比」は、応長改元のきっかけとなった疫病の蔓延と鬼騒動を関連づけた章段である。第七〇段「元応の清暑堂の御遊に、玄上は失せにし比」に示される「御遊」とは、文治二（一二二八）年十一月、清暑堂の御神楽の後に催された催馬楽の御遊のこと、琵琶玄上が盗難に遭っていたのは、文保二（一二二六）年閏十月から元応元（一二一九）年五月の間である。諸記録にも見える玄上紛失という重大事に、玄上と並び称される牧馬を弾じたこと、その「柱」が「ひとつ落ち」ているというさらなる危機に「御懷」の「そくひ」によって事なきを得た喜ばしさと「いかなる意趣」で行われたものであったか、という不確かさが、「元応の清暑堂の御遊に、玄上失せにし比」という舞台設定によって際立つのであった。第二四三段「八つになりし年」は、特定の季節や日付を示す他の章段とはやや性質を異にしているが、仏道をめぐる父との対話を記すこの最終章段を、幼少期の回想を語るものに規定する役割は確かに担っている。

このように整理した時、第三二段「九月廿日の比」における冒頭の時間明記もまた、章段全体に関わる必然性を持つと考えられる。それは、『枕草子』一七三段との引用関係から引き出される「長月の有明の月のありつつも君しきまさばわれも忘れじ」を想起させる

ための仕掛けであり、「月見る気色」は、かつて諸注に言われてきたような礼儀尊重、あるいは月光を思慕する情趣を解するふるまいとしてではなく、「有明の月ありつつも」という歌句を胸中に抱きながら月を眺めるものと見るべきだろう。

第三二段を有明の別れを題材とした章段と理解するにあたって、もうひとつ重要となるのは、語り手のまなざしが「月見る気色」を捉える場としての「妻戸」である。「ある人」を妻戸まで見送り、そこで目にした有明の月に心を留めて、妻戸を「いま少しおしあけて」そこに佇んでいる様子は、『枕草子』六一一段「暁に帰らむ人は」が描く理想的な「暁のありさま」を体现するものと言えるだろう。

格子押し上げ、妻戸ある所は、やがてもろとみに率て行きて、
昼のほどのおぼつかながらむ事なども言ひ出でにすべり出でな
むは、見送られて名残もをかしかりなむ。

（六一一段「暁に帰らむ人は」一一六―一一七頁）

妻戸とは、建物の妻、すなわち端に設けられた外開きの枢戸で、外からの視線を遮るため、戸の内側に御簾が掛けられている。妻戸は、出入りする場であると同時に、見る／見られる場でもあった。野分の朝、「おもしろき樺桜の咲き乱れたる」（③二六四頁）ような

紫上の美貌をはじめて垣間見たのは、夕霧が「妻戸の開きたる隙を何心もなく見入れたまへる」(③二六四頁)時である。第三二段において、「物のかくれより見あたる」語り手の視線が、妻戸で「月見る気色」を捉えるのは、こうした見る／見られる場としての妻戸のあり方の伝統によるものだろう。

また、第三二段に「やがてかけこもらましかば」とあるように、妻戸の内側には掛金具があり、夜間は基本的に施錠されている。『蜻蛉日記』や『源氏物語』には、突然の訪問や秘密の恋の手引きなどの場面で、妻戸の施錠をめぐる記述を確認できる。

『源氏物語』では、『枕草子』六一段と同様に、逢瀬の名残を惜しむ見送りの場としての妻戸も描かれている。次に引くのは、匂宮と中君の暁の別れの場面である。

母明石中宮の諫めを振り切つて宇治に訪れた匂宮は、今後再訪がままならないであろうことを告げて「思ひながらとだえあらむを、いかなるにかと思すな。夢にてもおろかならむ」(総角⑤二八一頁)と理解を求め、それを聞く中君は「絶え間あるべく思さるらむは、音に聞きし御心のほどしるきにや」(総角⑤二八一―二八二頁)と心中嘆く。しかし、出立前のわずかな時間も惜しみ、ともに妻戸の前で眼前に広がる山里の風景を眺めながら、朝の光に照らし出された恋人の姿を目の当たりにし、改めて互いに心奪われていく。

明けゆくほどの空に、妻戸おし開けたまひて、もろともに誘ひ出でて見たまへば、霧りわたれるさま、所がらのあはれ多くそひて、例の、柴積む舟のかすかに行きかふ跡の白波、目馴れずもある住まひのさまかなと、色なる御心にはをかしく思なさる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御容貌のまほにうつくしげにて、限りなくいつきすゑたらむ姫宮もかばかりこそはおはすべかれ、思ひなしの、わが方さまのいといつくしきぞかし、こまやかなるにほひなど、うちとけて見まほしう、なかなかなる心地す。(中略)男の御さまの、限りなくなまめかしくきよらにて、この世のみならず契り頼みきこえたまへば、思ひよらざりしこととは思ひながら、なかなか、かの目馴れたりし中納言の恥づかしさよりはとおぼえたまふ。(中略)若き人の御心にしみぬべく、たぐひ少なげなる朝明の姿を見送りに、なごりとまれる御移り香なども、人知れずものあはれるは、ざれたる御心かな。(総角⑤二八二―二八三頁)

匂宮と浮舟の密会の場面でも、「妻戸にもろともに率ておはして」(浮舟⑥一三五―一三六頁)別れを惜しむ状況が描かれる。どちらも、情熱的な恋の時間であると同時に、再びの逢瀬が叶うのか、叶うとしてそれがいつなのか、先の見えない別れであった。

再会の見えない悲痛な別れの場面として、須磨出立の朝も挙げられるだろう。²⁵⁾

明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木蔭のいと白き庭に薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜のあはれに多くたちまされり。隅の高欄におしかかりて、とばかりながめたまふ。中納言の君、見たてまつり送らむとにや、妻戸おし開けてゐたり。「また対面あらむことこそ思へばいと難けれ。かかりける世を知らで、心やすくもありぬべかりし月ごろを、さしも急がで隔てしよ」などのたまへば、ものも聞こえず泣く。

(須磨②一六七―一六八頁)

恋人たちが逢瀬の名残を惜しむ舞台としての妻戸という場は、時に、再びの逢瀬が叶わないかもしれない、という悲哀や苦悩とともにあらわれるのである。

『和泉式部日記』では、「九月廿日あまりばかりの有明の月」(四七頁)の夜、「いみじう久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらむかし。人やあるらむ」(四七頁)と思ひ立った宮が、間違になつていた女のもとを訪う。突然の訪問に対応できず、宮を迎

え入れることができなかった女は、「妻戸を押し開け」て「大空に西へかたぶきたる月のかげ、遠くすみわたたりて見ゆる」(五〇頁)を眺めながら、「過ぎにし方、今、行く末のことども」(五〇頁)を思うのであった。

『徒然草』第三二段が描き出す有明の別れは、「さりげないたしなみ」や「優雅なふるまい」などの「王朝的な美意識にあこがれた兼好の好み」²⁷⁾であり、「王朝風のすきごとの世界を再現しようとしたものである」といわれる。しかし、『枕草子』をはじめとした平安文学の表現世界と重ね合わせた時、「事ざまの優におぼえて」、「朝夕の心づかひなるべし」という屈託のない賛美とは裏腹に、そこには、悲しみの気配が漂っている。「その人、ほどなくうせにけると聞き侍りし」という一文で章段が結ばれる時、その行き着く先が明らかになるのである。

五 「ものあはれなり」

こうした章段のあり方は、「荒れたる庭」の「忍びたるけはひ」を「いとものあはれなり」と評する前半部にも示唆されている。『徒然草』における「ものあはれなり」の用例は、この第三二段に用いられた一例のみである。

「ものあはれなり」は、「対象の不定なけはひの如き場合はあはれなる感情は把持しえてもその対象を把へえない。之の常態に對して平安朝人は『物あはれなり』の形式を与へた。対象の側からは『けはひ哀』であり主觀の側からは『物あはれ』である」⁽²⁶⁾語と理解される。

捉えがたい「あはれ」を「ものあはれ」と示す時、そこに付される接頭語「もの」については、「何となく」「漠然と」といった意味に解する立場と「運命的なもの」を表す「重い意味」に理解しようとする立場がある。「もの」形容詞の意味と用法を調査分析した本廣陽子氏は、情意性、常態性形容詞それぞれについて考察し、「情意性」「もの」形容詞の基本的意味は、その漠然性である」としている⁽²⁷⁾。また、「もの」は本来「運命的な世界を表す語であつた」が「中古の比較的早い時期に」それは「希薄」になり、「空間的」な作用を持つ語として理解できるとする根来司氏の論考がある。陣野英則氏は、語り手と聞き手とが共感によってつながつた言語空間を作り出す「ものあはれなり」の作用に首肯しつつ、「空間的なひろがり」だけではなく「時間性」を含めた幅広い「ひろがり」の機能を持つことを論じている⁽²⁸⁾。

「ものあはれなり」は、前期物語や歌物語には登場しない語である。『蜻蛉日記』以降の日記作品に散見されるようになり、『源氏物

語』では五三例⁽²⁹⁾を数えることができる。同時代以降の歴史物語や『狭衣物語』などの後期物語にも確認することはできるものの、『源氏物語』の用例数は顕著に多い。(表1)

日記文学における「九月のつごもり、いとあはれなる空の気色なり。まして昨日今日、風いと寒く、時雨うちしつ、いみじくものあはれにおぼえたり」(『蜻蛉日記』二六四頁)、「風の音、木の葉の残りあるまじげに吹きたる、つねよりもものあはれにおぼゆ」(『和泉式部日記』四九頁)は、空を見上げ、風の音を聞きながら「ものあはれにおぼ」えており、「空間的なひろがり」と強い結びつきを持つ用例と言えるだろう。「雨すこしうちそそき、山風ひやかに吹きたるに、滝のよどもまさりて音高う聞こゆ。すこしねぶたげなる読経の絶え絶えずごく聞こゆるなど、すずろなる人も所がらものあはれなり」(若紫①二一五頁)や「中将、夜もすがら荒き風の音にも、すずろにもものあはれなり」(野分③二六九頁)といった

表1 平安文学作品における「ものあはれ」用例数

0	土佐	0	竹取
2	蜻蛉	0	伊勢
0	枕	0	大和
2	和泉	0	うつほ
1	紫式部	53	源氏
1	讃岐	14	狭衣
2	栄花	3	寝覚
1	大鏡	4	浜松

『源氏物語』の用例でも、激しい風の音とともに「ものあはれなり」が表れている。

「時間性」と強く結びつく用例も見出すことができる。「三月になりぬ。木の芽すずめがくれになりて、祭のころおぼえて、袖、笛こひしう、いとものあはれなるにそへても、おとなきことをなほおどろかしけるもくやしう、例の絶え間よりもやすからずおぼえけむは、なにの心にかありけむ」(『蜻蛉日記』二九三頁)、「住み定まらずなりにたりとも思ひやりつつ、おとなひくる人も、かたうなどしつつ、すべて、はかなきことにふれても、あらぬ世に来たる心地ぞ、ここにてしもうちまさり、ものあはれなりける」(『紫式部日記』一七〇頁)では、移り変わる時間のなかに身を置き、そこで深まっていく憂いとして「ものあはれなり」がある。「九月晦日」に源氏と偶然再会した空蟬の「人知れず昔のこと忘れねば、とり返してものあはれなり」(関屋②三六一頁)や明石の生活を思い出す源氏の「月の明きに帰りたまふ。ありし夜のこと思し出でらるるをり過ぐさず、かの琴の御琴さし出でたり。そこはかとなくものあはれなる」(松風②四一四頁)、源氏が亡き六条御息所との思い出を齋宮女御に語る「昔の御事ども、かの野宮に立ちわづらひし曙などを聞こえ出でたまふ、いとものあはれと思したり」(薄雲②四五九頁)など、『源氏物語』においても「昔」や「ありし夜」といった時間表現と

の関わりを確認できる。

『讃岐典侍日記』序の「心のどかなる里居に、常よりも昔今のこと思ひつづけられて、ものあはれなれば、端を見出してみれば、雲のたたずまひ、空のけしき、思ひしり顔にむら雲がちなるを見るにも、「雲居の雲」といひけん人もことわりと見えて」(三九一頁)では、「昔今のこと」という時間によって生じた「ものあはれなり」が、「雲のたたずまひ」や「空のけしき」と結びつく。時間の推移に喚起され、空間と呼応する意識は、この後、堀河天皇の重態、そして崩御という痛切な過去の回想へと向かっていく。

「ものあはれなり」という語は、『榮花物語』においても哀傷との関わりが深い。一条天皇は、自らの死を予感して宮中からの退出を願う母東三条院の様子に、「院の御方に参りたりつれば、いと心細げにのたまはせつるこそ、いともの思はしくなりはべりぬれ」と彰子のもとで「いとものあはれにのたまはす」(とりべ野①三四四頁)。「亡き中宮姫子女王所生の祐子・禊子内親王の参内は、「殿の宮も入らせたまへり。昔おぼえて女房などものあはれなり」(暮まつほし③三〇九頁)と語られる。

死に関わる場面や文脈に置かれる傾向は、これらの用例に先んじて『源氏物語』にもあらわれている。『源氏物語』における「ものあはれなり」の用例をまとめたものが、表2である。

表2 『源氏物語』における「ものあはれ」用例一覧

1	空蟬	①130	されたる心にもものあはれなるべし	軒端荻に後朝の文なし
2	若紫	①215	すずろなる人も所がらものあはれなり	源氏、紫上の引取り請う
3	末摘花	①295	山里の心地してもものあはれなるを	末摘花邸の様子
4	葵	②54	時雨うちしてもものあはれなる暮つ方	◎葵上服喪中の左大臣邸
5	賢木	②85	野辺を分け入りたまふよりいともものあはれなり	野宮訪問
6	賢木	②99	をりからものあはれにて	◎桐壺帝崩御後
7	賢木	②136	客人も、いともものあはれなるけしきに	◎桐壺帝服喪中の新年
8	賢木	②137	ものあはれなる気色さへ添はせたまへるは	◎桐壺帝服喪中の新年
9	明石	②239	ただなるよりはものあはれなり	明石君、身の上を嘆く
10	明石	②250	もしはものあはれなる曙などやうに紛らはして	明石君との縁談に逡巡
11	明石	②256	思しやらるるにもものあはれなり	明石君訪問に慨嘆する
12	明石	②261	二条の君も、ものあはれに慰む方なく	紫上、明石君の存在知る
13	関屋	②361	昔のこと忘れねば、とり返してもものあはれなり	空蟬、逢坂で偶然再会
14	松風	②414	そこはかたなくものあはれなるに	大堰にて明石の日々回想
15	松風	②420	ものあはれなる酔泣きどもあるべし	人々、須磨流涕を思う
16	薄雲	②448	いともものあはれにおぼさる	◎藤壺崩御後
17	薄雲	②459	いともものあはれと思したり	◎六条御息所偲ぶ
18	朝顔	②484	ものあはれなる御気色を、心ときめきに思ひて	◎今は亡き後宮女性偲ぶ
19	少女	③37	あやしくものあはれなる夕かな	大宮邸で内大臣合奏
20	初音	③156	尼君ものあはれなるけしひにて	二条院で空蟬と語らう
21	野分	③269	すずろにもものあはれなり	野分の垣間見後の夕霧
22	藤袴	③331	あやしくものあはれなるわざにはべりけれ	◎大宮服喪中
23	藤裏葉	③457	いともものあはれに思さる	◎三条邸で大宮生前偲ぶ
24	若菜上	④51	空のけしきもものあはれに	紫上、女三宮降嫁知る
25	若菜上	④63	忍ぶれどなほものあはれなり	紫上、降嫁の三日夜
26	若菜上	④68	夜深き鶏の声の聞こえたるものあはれなり	紫上、降嫁の三日夜
27	若菜上	④105	いともものあはれにながめておはするに、	明石姫君、生い立ち知る
28	若菜上	④126	ものあはれなる御気色どもしるければ	明石姫君、入道の文見る
29	柏木	④323	いともものあはれに思さる	◎薫を抱いて源氏慨嘆
30	柏木	④337	けしき見たまふも、ものあはれなり	◎夕霧、一条宮に弔問
31	横笛	④352	秋の夕にもものあはれなるに	◎夕霧、一条宮に訪問
32	横笛	④353	いと静かにもものあはれなり	◎夕霧、一条宮に訪問
33	鈴虫	④383	いつとてものあはれならぬをりなき中に	◎源氏、柏木を回想
34	夕霧	④408	とどめがたうものあはれなり	夕霧、落葉宮に接近
35	御法	④493	人知れぬ御心の中にもものあはれに思されける	◎紫上、病重く出家の志
36	御法	④500	よろづにつけてものあはれなり	◎紫上、危篤
37	幻	④535	女もものあはれにおぼゆべし、	◎紫上偲び、明石君に語る
38	匂兵部卿	⑤29	身を思ひ知る方ありて、ものあはれになども	薫の厭世
39	紅梅	⑤48	ものあはれにすぐ思ひめぐらし	◎紅梅、源氏偲ぶ
40	竹河	⑤78	みなものあはれなり	◎大君入内時、髭黒偲ぶ
41	竹河	⑤90	ものあはれなるをりからにや	◎大君入内時、髭黒偲ぶ
42	竹河	⑤99	ものあはれなる気色を人々をかしがる	大君入内を薫嘆く
43	橋姫	⑤147	いにしへのこと聞きはべるも、ものあはれに	薫、弁の昔語りに不審
44	橋姫	⑤155	いとうちおどろかされてものあはれなるに	薫、弁の昔語りに不審
45	総角	⑤284	人知れずものあはれなるは、ざれたる御心かな	中君、匂宮見送る
46	総角	⑤299	いともものあはれなり	大君、匂宮素通り嘆く
47	早蕨	⑤356	いみじくものあはれと思ひたまへるけしひ	◎中君、亡き父姉偲ぶ
48	東屋	⑥96	そこはかたなくものあはれなるかな	◎薫、道中に大君偲ぶ
49	蜻蛉	⑥223	いともものあはれなり	◎薫、浮舟偲ぶ
50	蜻蛉	⑥245	さうざうしくものあはれなるまに	◎式部卿服喪中
51	蜻蛉	⑥246	ものあはれなる夕暮	◎同服喪中、浮舟偲ぶ
52	手習	⑥311	小野に立ち寄りて、ものあはれにもありしかな	中将、浮舟垣間見後
53	手習	⑥349	入り来るよりぞものあはれなりける	中将、尼姿の浮舟見る

全五三例中二五例が、弔問、服喪、危篤など死にまつわる場面、あるいは故人を偲ぶ文脈のなかで用いられている。

もちろん「ものあはれなり」という語が、哀傷そのものとつねに結びつく表現であるわけではない。また、「運命、動かしがたい事実・成り行き」⁽³⁵⁾としての「もの」の意は希薄となったとされ、確かに「ものあはれなり」の語義に、そうした「重い」意味を直接読み取ることは難しいだろう。しかし、「けはひ」や「空」、あるいは、そこに響く「音」や漂う「匂ひ」といった捉えがたいひろがりに、移り変わっていく時間のなかで失われたもの、失われつつあるものへの思いを重ねることを可能にする表現として、「ものあはれなり」が見出されたといえるのではないか。

土方洋一氏は、賢木巻における野宮訪問の場面「はるけき野辺を分け入りたまふよりいともあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれる虫の音に、松風すぐく吹きあはせて、そのこととも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえる、いと艶なり」⁽²⁾（八五頁）を取り上げ、「六条御息所の死はまだ先の落標巻でのこと」であるにも関わらず、〈野辺―浅茅―秋風〉ということばの連なりが「歌ことばの意味生成機能」⁽³⁶⁾によって「哀傷」のイメージを漂わせている」と指摘する。そうした時空を規定する表現としてまず置かれているのが、「ものあはれなり」なのである。

『徒然草』第三二段における「ものあはれなり」もまた、「死と哀傷のイメージ」を揺曳する。「人のなきあと」の悲しみを語る第三〇段から展開し、「今はなき人」との思い出を綴る第三一段との対として構成されている第三二段は、「その人、ほどなくうせにけると聞き侍りし」という末文にふさわしい無常の悲しみの気配が章段全体の各表現によって形成されており、その背後には平安文学の表現世界がある。「けはひ」や「匂ひ」という空間的な語に引き出された「ものあはれなり」という感懐は、「荒れたる庭の露しげき」⁽³⁷⁾という場のイメージとも響き合いながら、章段の結びへとつながっていくのである。

六 おわりに

『徒然草』第三二段における『枕草子』引用は、古注釈以来指摘されているものだが、王朝風の優美さを再現しようとする懐旧的な趣味としてしか理解されてこなかったのではないか。

本稿は、王朝的雰囲気との再現にとどまらない具体的な引用を考察することを起点として、平安文学の表現世界を引き入れた章段のあり方を考察したものである。

前半では、先行研究を整理し、『枕草子』引用との関わりによっ

て「月見る気色」が示す意味を、平安文学作品における「妻戸」という場のあり方と合わせて考察した。後半は、「ものあはれなり」という表現を取り上げ、平安文学作品における用例を検討することで、章段の主題と響き合うものとして、どのようなはたらきをもっているのかを論じた。

注

- (1) 安良岡康作『方丈記・徒然草』（新編日本古典文学全集、小学館、一九八五年）頭注。
- (2) 安良岡康作『徒然草全注釈』（角川書店、一九六八年）。
- (3) 桑原博史『徒然草研究序説』（明治書院、一九七六年）。
- (4) 橘純一『標注徒然草新講』（武蔵野書院、一九四九年）。
- (5) 保坂弘司『徒然草』（学燈文庫、一九五一年）。
- (6) 高乗勲『徒然草の研究』（自治日報社、一九六八年）。
- (7) 新編国家大観番号三三。
- (8) 稲田利徳「兼好自撰歌集」覚え書（『研究集録（岡山大学）』、一九九六年三月）。
- (9) 桑原博史『徒然草の鑑賞と批評』（明治書院、一九七七年）。
- (10) 桑原博史『徒然草研究序説』（明治書院、一九七六年）。
- (11) 横井博「徒然草の鑑賞（五）第三十一段〜第四十段」（『徒然草講座 第二巻―徒然草とその鑑賞Ⅰ―有精堂、一九七四年）。
- (12) 三田村雅子「徒然草の源泉―枕草子」（『徒然草講座 第四巻―言語・源泉・影響―有精堂、一九七四年）。
- (13) 鹿野しのぶ「徒然草における枕草子受容―特に類聚的章段を中心に」（『語文（大阪大学）』八七、一九九三年十二月）。
- (14) 松永貞徳『なぐさみ草』、北村季吟『徒然草文段抄』における第三二段の注釈では、『枕草子』に関する記述はない。
- (15) 「ある人」については諸説があり、とくに本章段の内容を事実と見る立場からは、人物の比定が行われてきた。「兼好よりは身分の高い人物である。主筋に当る堀川家の誰かであろうか。ともかく、「ある人」と兼好との関係は光る源氏と惟光とのそれにも似たものであろう」とする久保田淳氏（『徒然草必携』学燈社、一九八一年）、あるいは、風巻景次郎氏の「家司兼好の社会圏（一）―徒然草創作時の兼好を彫塑する試み」（『国語国文研究』五、一九五二年三月）に示された兼好の伝記を基盤に、「兼好周辺の人として考えると、この具親が最も可能性があるといえよう。そして、在俗時代の主従関係から、兼好がその月身に供をしたことも考えられないことはないであろう」とする安良岡康作氏（『徒然草全注釈』前掲（2）参照）の考察がある。ただし、章段そのものにおけ

る虚構と事実の関係と同様、確たる論証は難しい。また、小川剛生氏「卜部兼好伝批判―「兼好法師」から「吉田兼好へ」」「国語国文学研究」四九、二〇一四年三月）により、兼好の伝記について、今後大きく発展あるいは修正されることも予想される。

(16) 前掲三田村論文(12)。

(17) 『万葉集』「九月之在明能月夜有乍毛君之来座者吾将恋八方（ながつきのありあけのつきよありつつよきみしまさばわれこひめやも）」（秋相聞・二三〇〇）は、第三句に異同あり。第五句は『拾遺』と『万葉』が一致しており、『古今六帖』「われも忘れじ」のみ異なる。

(18) 津島知明「『円形脱毛症』にされた女」、『枕草子論究―日記回想段の〈現実〉構成』翰林書房、二〇一四年）。

(19) 『大和物語』一四九段で、女は自らのもとで夜を過ごさない男を送り出し、男は女の不実を疑って「前裁の中にかくれ」るのに対して、後朝の別れを「ことばをつくして」惜しんだ後、「出づるかたを見せて立ち返り、立部の間に蔭に添ひて立」つ『枕草子』一七三段の男の意図は、いかなるものだったのだろうか。優美な後朝の別れを描く風流譚、あるいはそれを裏切る好色滑稽譚とも言われ、しばしば議論もなされる

ところだが、『大和物語』一四九段との関わりを踏まえて読む可能性を今後考えてみたい。

(20) 藤本宗利「『枕草子』における戯画化の方法」、『枕草子研究』風間書房、二〇〇二年）。

(21) 『なぐさみ草』の挿絵では、「ある人」を見送る人物を男性とする。「一般にこの場面の主人は女性と解釈されており、『なぐさみ草』の挿絵は特異である」ことが、島内裕子「徒然草文化圏の生成と展開」(笠間書院、二〇〇九年)で指摘されている。また、同書では、『なぐさみ草』および『なぐさみ草』に依拠した淡彩色紙や蓬左本が持つのもう一つの特徴として、「本文では妻戸とある」ものを「遣戸で描いている」ことが挙げられている。こうした挿絵のあり方は、『寿命院抄』や『野槌』に記された『枕草子』との関連性についての注釈を『なぐさみ草』が踏襲しなかったことと関わっているだろう。

(22) 桑原博史「徒然草の鑑賞と批評」(明治書院、一九七七年)。

(23) 御遊の開催は、文保二(一一三二)年十一月二十四日である。文保二年二月二十六日践祚、三月二十九日即位、大嘗会などの儀式を経て、翌年四月「代始」によって「元応」に改元したことを考えれば、後醍醐天皇の大嘗会の期間中の

出来事を「元応の清暑堂の御遊」と表現するのは不自然ではない。

- (24) この御遊の際、「拍子」の務めをめぐって「待賢門内」で「綾小路前宰相」有時が「殺害」されたことが、『御遊抄』および『増鏡』卷十三「秋のみ山」に記されており、「柱を外されて面目を失わせようとした程度」のことは、児童に類するいやがらせにすぎなかった」（久保田淳『徒然草必携』学燈社、一九八一年）という。

- (25) 平安文学作品における「妻戸」については、拙稿『枕草子』戸考』（『枕草子創造と新生』翰林書房、二〇一四年）第一節で論じた。以下、同論文を適宜参照している。

- (26) 安良岡康作氏は、「ある人」を堀河家の具親に比定する（前掲（2）および（14）参照）に際して、『公卿補任』ならびに『増鏡』卷十三「秋のみ山」に記される大納言典侍との恋に起因する謹慎事件を引く。『公卿補任』には、「文保二年八月八日解官宣下也（依女事也）」、翌三年「壬七月五日還任」とあり。『増鏡』では、「やむことなき際にはあらねど、御覚えの時なれば、きびしく咎めさせ給て、げに須磨の浦へもつかはさまほしきまで思されども、さすがにて、官みなとどめて、いみじう堪ぜさせ給へば、かしこまりて、岩倉の山床にこも

りゐる」（四一五頁）と、源氏の須磨流謫を下敷きにこの事件の顛末を記述している。

- (27) 前掲桑原書（10）。
- (28) 前掲三田村論文（12）。
- (29) 西尾光雄「あはれ」について」（『文学』四一〇、一九三六年十月）。
- (30) 本廣陽子「もの」形容詞の意味と用法の発展―源氏物語の果たした役割」（『国語国文』七七・六、二〇〇八年六月）。
- (31) 東辻保和「もの」複合形容詞の意義―源氏物語の用例を中心として」（『国語教育研究』九、一九六四年十一月）。
- (32) 根来司「源氏物語的空間―源氏物語の文章」（『平安女流文学の研究』続編「枕草子、源氏物語、紫式部日記を中心として」笠間書院、一九七三年）。
- (33) 陣野英則「『源氏物語』の言葉と時空―「ものあはれなり」をめぐって」（『国語と国文学』九一―一一、二〇一四年十一月）。
- (34) 前掲根来論文（32）および陣野論文（33）で指摘される「ものあはれなり」の用例数は、五六例である。本稿では、新編日本古典文学全集の本文に対応するジャンナレッジの検索結果に依拠した五三例のみを確認している。また、前掲根来論文

では、『枕草子』の用例数についても、一例としているが、同じく本稿では、新編日本古典文学全集の本文による用例数を示している。

- (35) 大野晋「もののあはれ」(『古典基礎語の世界―源氏物語のものあはれ』角川ソフィア文庫、二〇〇一年)。

- (36) 土方洋一『源氏物語』と歌ことばの記憶(『国語と国文学』八五―三、二〇〇八年三月)。

- (37) 『源氏物語』における「露しげき」は、姿を消した夕顔の思出を語る頭中将の「いともの思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきをながめて虫の音に競へる気色、昔物語めきておぼえはべりし」(帚木①八二頁)、夕霧の弔問とその後の見舞いを受け、柏木遺愛の笛を譲る一条御息所の詠歌「露しげきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ虫の声かな」(④三五七頁)の二例である。

本文引用ならびに章段名・章段番号・頁数については、『徒然草』『枕草子』『伊勢物語』『大和物語』『和漢朗詠集』『蜻蛉日記』『紫式部日記』『和泉式部日記』『讃岐典侍日記』『源氏物語』は新編日本古典文学全集(小学館)、『増鏡』は日本古典文学大系(岩波書店)、和歌引用および番号については、新編国歌大観による。